## 2021年度 コンピュータ演習 第10回12月10日

- 1. 授業計画
- 2. 復習: 70線の計算(小演習6)
- 3. 演習1:平衡組成の計算
  - (1) T<sub>0</sub>温度の計算(復習)
  - (2) 平衡組成の計算
  - (3) 全率固溶型状態図の計算と作図
- 4. 課題の提出(12/24 0:00 締切り)
- 5. 次回の予定(擬似乱数と配列のソート)

#### 2. 復習: 7。線の計算と作図(小演習6)

#### 

$$G_{m}^{\phi} = x_{A} \circ G_{A}^{\phi} + x_{B} \circ G_{B}^{\phi} + x_{A} x_{B} \Omega_{A,B}^{\phi}$$
 (エンタルピー項 
$$+ RT(x_{A} \ln x_{A} + x_{B} \ln x_{B})$$
 (エントロピー項

1	${}^{\circ}G_A^{oldsymbol{\phi}}$		$^{\circ}G_{B}^{\phi}$		$arOmega_{f AB}^{m{\phi}}$	
<b>\Phi</b>	変数名	値	変数名	値	変数名	値
L	gla	+1250 <i>R</i> - <i>RT</i>	glb	+750 <i>R</i> - <i>RT</i>	WL	<b>%1</b>
S	gsa	0	gsb	0	WS	<b>※2</b>

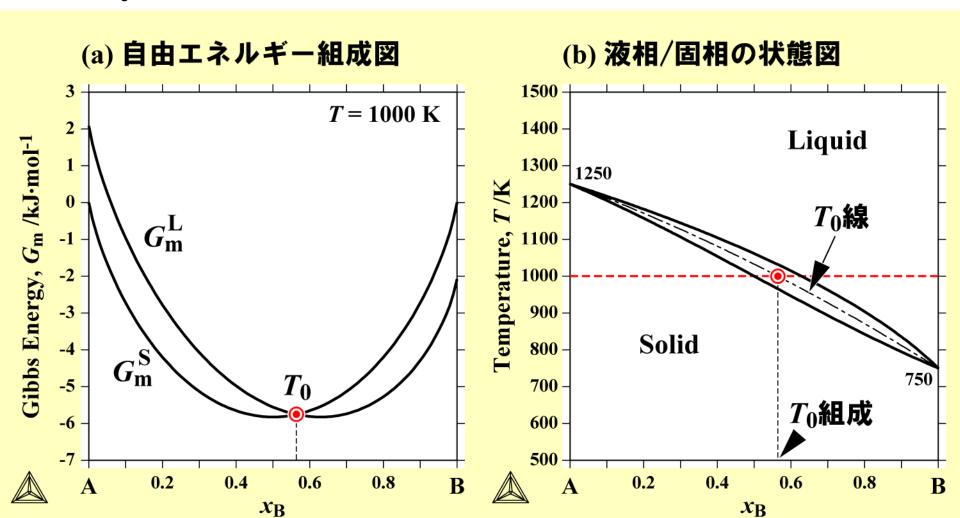
◆ R は気体定数(8.31447 [J/mol]), T は絶対温度[K]

※1 WL = 4.\*R\*{ (学籍番号の末尾3桁) - 90.}

※2 WS = 2.\*R\* { 45. - (学籍番号の末尾3桁)}

## 2. 復習: 7。線の計算と作図(小演習6)

温度 T が750~1250[K]の範囲(10[K]ステップ)で,各温度の $T_0$ 組成を求めるプログラムを追加し, $T_0$ 組成(x軸) vs 温度(y軸) の状態図( $T_0$ 線)を作図して提出せよ.



#### Tn点の計算:Newton法(復習)

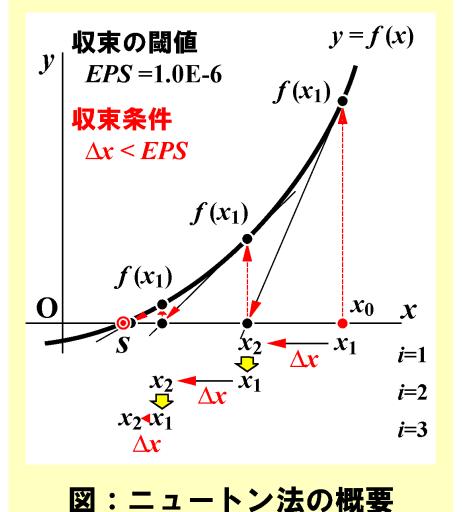
・ニュートン法:f(x) = 0

$$\left(\frac{df}{dx}\right)_{x=x_1} \cdot \Delta x = -f(x_1)$$

$$x_2 = x_1 + \Delta x$$

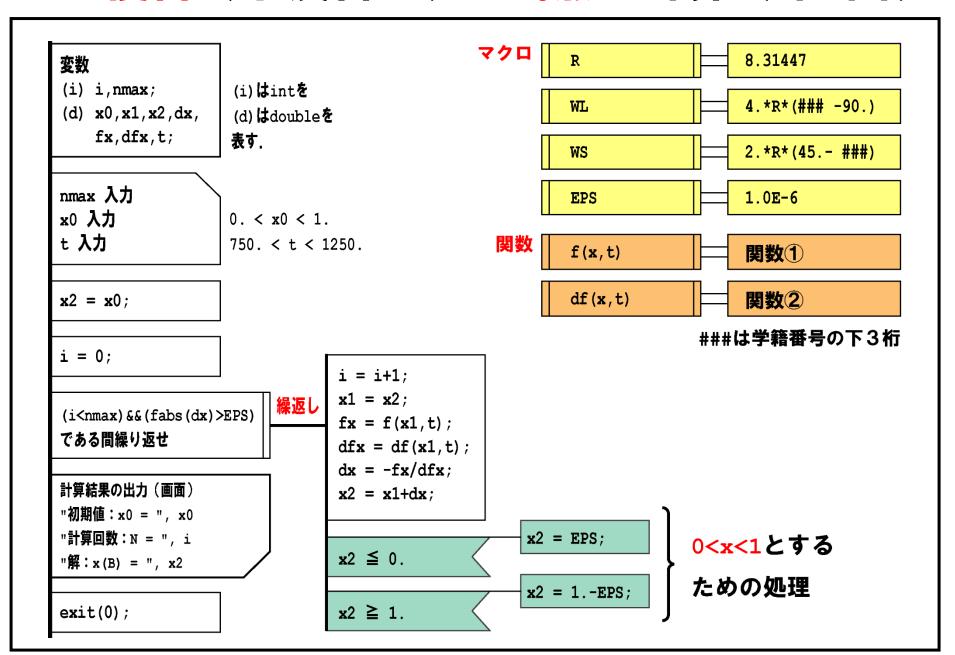
▶ プログラム中では.

```
fx = f(x1,t);
dfx = df(x1);
  = -fx/dfx;
x2 = x1+dx;
```

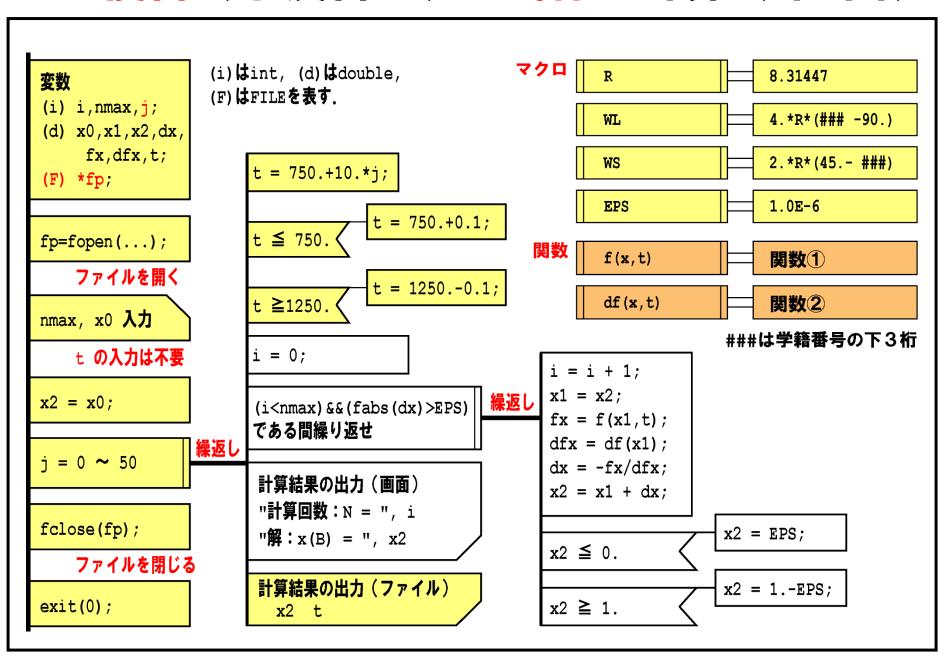


% 方程式を解き、 $\Delta x$  を求め、次( $x_2$ )へ進む.

#### 2. 復習(小演習5): 70点の計算(第7回)



#### 2. 復習(小演習6): 70線の計算(第8回)



#### 2. 復習(小演習6): 7。線の計算(第8回)

小演習6-1:温度を10Kステップで変化させ、各温度の $T_0$ 組成  $x_B$ を求める.

$$f(x,T) = G_{\mathbf{m}}^{\mathbf{L}} - G_{\mathbf{m}}^{\mathbf{S}}$$

$$= (1250R - RT) \times (1-x) + (750R - RT) \times x$$

$$+ (WL - WS) \times (1-x)x \qquad x$$
 **万** 工次関数

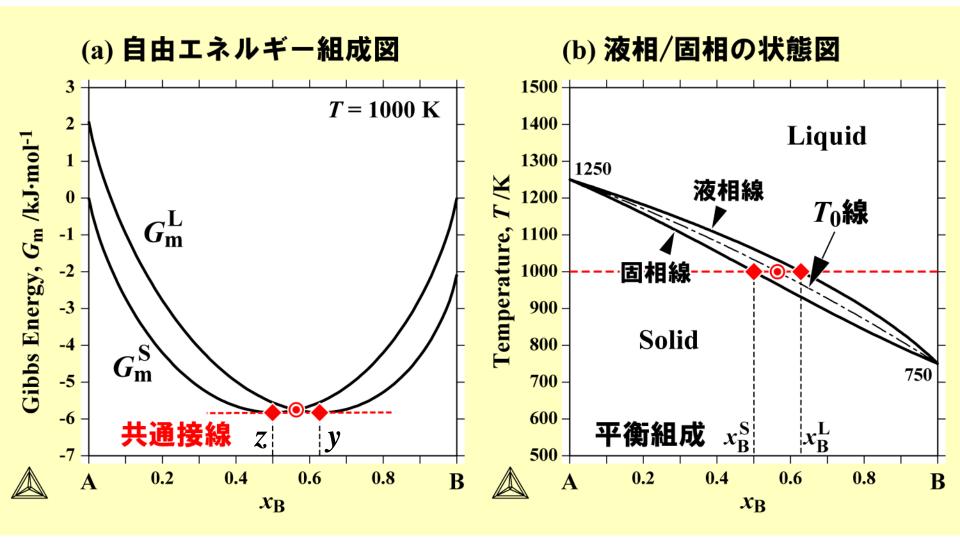
Tの一次関数  $\Rightarrow$  Tを簡単に求めることができる



小演習6-2:組成 $x_B$ を0.01ステップで変化させ、各組成の $T_0$ 温度を求める。

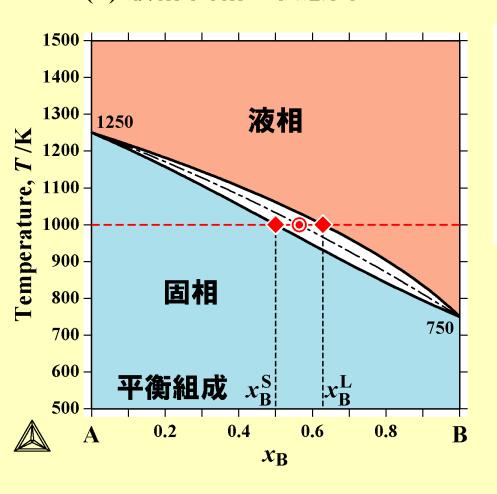
$$T = \{ (WL - WS) * (1 - x) * x + 1250 * R * (1 - x) + 750 * R * x \} / R$$

# 3. 演習 1: 平衡組成の計算 2変数のNewton(Newton-Raphson)法



# 3. 演習 1: 液相 / 固相の平衡条件 ー 化学ポテンシャル ー

#### (b) 液相/固相の状態図



#### (c) 液相/固相の平衡条件

液相中と固相中における, 成分原子Aの<mark>化学ポテンシャル</mark> μ<sub>A</sub> および,

成分原子Bの化学ポテンシャル  $\mu_B$ が、それぞれ等しい。

固相:
$$x_B^S$$
 液相: $x_B^L$ 

$$\mu_A^S = \mu_A^L$$

$$\mu_B^S = \mu_B^L$$

## 3. 演習1:液相/固相の平衡条件 ー 化学ポテンシャル ー

#### (c) 液相/固相の平衡条件

液相中と固相中における,

成分原子Aの化学ポテンシャル  $\mu_A$  および,

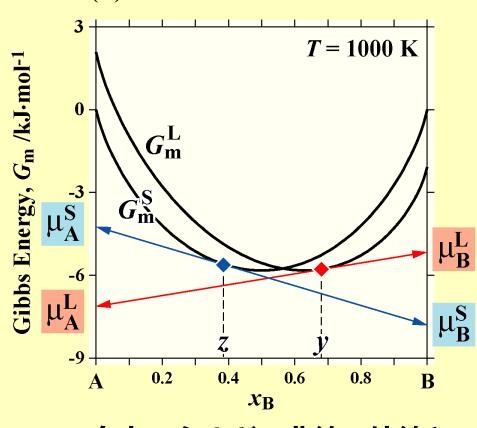
成分原子Bの化学ポテンシャル  $\mu_B$ が、それぞれ等しい。

固相:
$$x_B^S$$
 液相: $x_B^L$ 

$$\mu_A^S = \mu_A^L$$

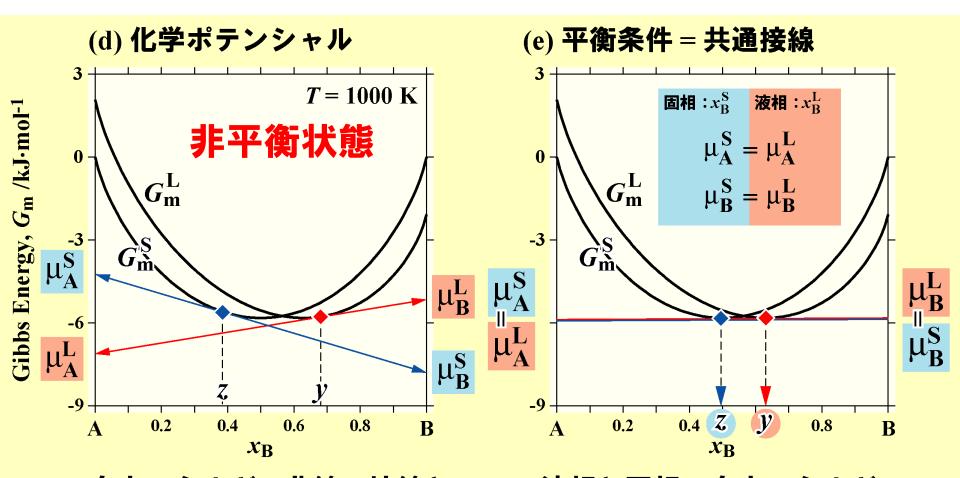
$$\mu_B^S = \mu_B^L$$





自由エネルギー曲線の接線とA・B 両縦軸との交点が 化学ポテンシャル.

## 3. 演習1:液相/固相の平衡条件 一共通接線の法則 一



自由エネルギー曲線の接線とA・B 両縦軸との交点が 化学ポテンシャル.

液相と固相の自由エネルギー 曲線に共通の接線を引いた時の 2つの接点が平衡組成。

### 3. To点の計算:Newton法(復習)

・ニュートン法:f(x) = 0

$$\left(\frac{df}{dx}\right)_{x=x_1} \cdot \Delta x = -f(x_1)$$

$$x_2 = x_1 + \Delta x$$

◆ プログラム中では,

```
fx = f(x1,t);
dfx = df(x1,t);
dx = -fx/dfx;
```

$$x2 = x1+dx;$$

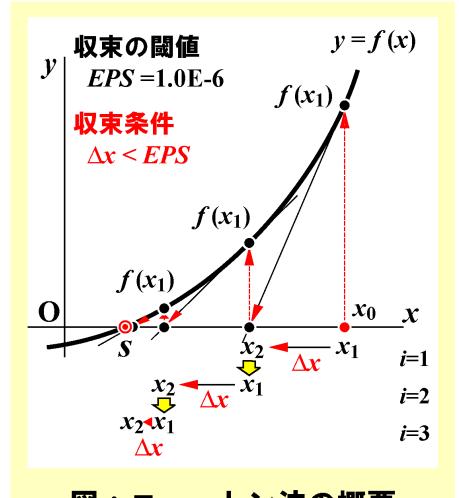


図:ニュートン法の概要

symp 方程式を解き、 $\Delta x$  を求め、次( $x_2$ )へ進む.

## 3. 相平衡の計算:Newton法(2変数)

#### ・ニュートン法(平衡条件2式を解く)

$$\begin{split} g(y,z,T) &= \underline{\mu_{A}^{L} - \mu_{A}^{S}} \\ &= \{G_{A}^{L} + \Omega_{AB}^{L} \cdot y^{2} + RT \ln(1-y)\} \\ &- \{G_{A}^{S} + \Omega_{AB}^{S} \cdot z^{2} + RT \ln(1-z)\} \underline{\hspace{0.5cm}} = 0 \end{split}$$
 
$$h(y,z,T) &= \underline{\mu_{B}^{L} - \mu_{B}^{S}} \\ &= \{G_{B}^{L} + \Omega_{AB}^{L} \cdot (1-y)^{2} + RT \ln(y)\} \\ &- \{G_{B}^{S} + \Omega_{AB}^{S} \cdot (1-z)^{2} + RT \ln(z)\} \underline{\hspace{0.5cm}} = 0 \end{split}$$

y:液相中のB濃度、z:固相中のB濃度、T:温度

## 3. 相平衡の計算:Newton法(2変数)

※連立方程式を解き、Δy と Δz を求め、次へ進む、

$$\left(\frac{\partial g}{\partial y}\right)_{\substack{y=y_1\\z=z_1}} \cdot \Delta y + \left(\frac{\partial g}{\partial z}\right)_{\substack{y=y_1\\z=z_1}} \cdot \Delta z = -g(y_1, z_1, T)$$

$$\left(\frac{\partial h}{\partial y}\right)_{\substack{y=y_1\\z=z_1}} \cdot \Delta y + \left(\frac{\partial h}{\partial z}\right)_{\substack{y=y_1\\z=z_1}} \cdot \Delta z = -h(y_1, z_1, T)$$

$$y_2 = y_1 + \Delta y, \qquad z_2 = z_1 + \Delta z$$

#### 3. 相平衡の計算: Newton法(2変数)

 $※連立方程式を解き、<math>\Delta y$  と  $\Delta z$  を求め、次へ進む.

$$\begin{pmatrix}
\frac{\partial g}{\partial y} & | y = y_1 & \frac{\partial g}{\partial z} & | y = y_1 \\
z = z_1 & z = z_1 \\
\frac{\partial h}{\partial y} & | y = y_1 & \frac{\partial h}{\partial z} & | y = y_1 \\
z = z_1 & z = z_1
\end{pmatrix}
\cdot \begin{pmatrix}
\Delta y \\
\Delta z
\end{pmatrix} = \begin{pmatrix}
-g(y_1, z_1, T) \\
-h(y_1, z_1, T)
\end{pmatrix}$$

$$y_2 = y_1 + \Delta y, \quad z_2 = z_1 + \Delta z$$

#### 3. 相平衡の計算:Newton法(2変数)

#### ・偏微分関数

## 3. 相平衡の計算: Newton法(2変数)

$$\frac{1}{\cot 3} \begin{pmatrix} \Delta y \\ \Delta z \end{pmatrix} = \frac{1}{\det A} \begin{pmatrix} \left(\frac{\partial h}{\partial z}\right)_{y=y_1} & -\left(\frac{\partial g}{\partial z}\right)_{y=y_1} \\ z=z_1 & z=z_1 \\ -\left(\frac{\partial h}{\partial y}\right)_{y=y_1} & \left(\frac{\partial g}{\partial y}\right)_{y=y_1} \\ z=z_1 & z=z_1 \end{pmatrix} \cdot \begin{pmatrix} -g(y_1,z_1) \\ -h(y_1,z_1) \end{pmatrix}$$

$$\det A = \left(\frac{\partial g}{\partial y}\right)_{\substack{y=y_1\\z=z_1}} \cdot \left(\frac{\partial h}{\partial z}\right)_{\substack{y=y_1\\z=z_1}} - \left(\frac{\partial g}{\partial z}\right)_{\substack{y=y_1\\z=z_1}} \cdot \left(\frac{\partial h}{\partial y}\right)_{\substack{y=y_1\\z=z_1}} \cdot \left(\frac{\partial h}{\partial y}\right)_{\substack{y=y_1\\z=z_1}}$$

#### 3. 演習1:平衡組成の計算と状態図

◆ スライドP.2の自由エネルギー関数を用いて,

組成xが0 < x < 1の範囲(組成の刻み幅がdx)で各組成の $T_0$ 温度を求め、その温度における平衡組成を計算するプログラムを追加して、全率固溶型状態図(固相線、液相線、 $T_0$ 線)を作図せよ、プログラム、データファイル及び、状態図のpngファイルを提出せよ、

#### 提出ファイル:

- (1) プログラム (ファイル名:学籍番号-e1.c)
- (2) データファイル (ファイル名: 学籍番号-e1.txt)
- (3) グラフ(ファイル名:学籍番号-e1.png )

#### 3. 演習1:相平衡の計算

#### ・計算手順:

- (1) 小演習6-2を利用する.
- (2) 関数の作成(ISTUよりダウンロード可): g(y, z, T), h(y, z, T)と偏微分関数(関数1~6)
- (3) 定数(#define)と変数(int, double)の宣言.
- (4) 計算回数 n(100)と組成の刻み幅dx(0.01)を入力する.
- (5) 液相と固相中の成分Bの初期組成:y0 とz0 を設定する.
- (6) 組成xが0 < x < 1の範囲(組成の刻み幅がdx)で各組成の $T_0$ 温度を求め、その温度における平衡組成をNewton法を用いて計算し、固液2相領域の状態図を作図する。

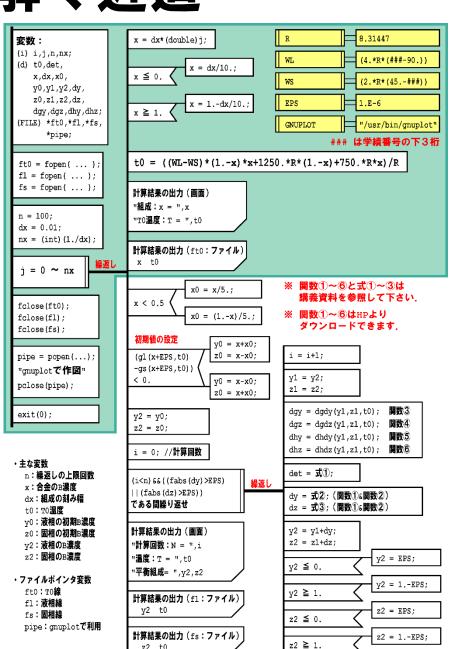
3. 演習1:平衡組成の計算と状態図

PAD図は別紙参照. PAD図では,

- ※組成xにおけるT<sub>0</sub>温度を求めている点に注意して下さい。
- ※ 求めたT<sub>0</sub>温度における平衡組成を 計算する.

## 演習1を解く近道

▶ISTUから 今週(第10回)の ・自由エネルギー関数. (10 Gibbs.txt) をダウンロードして下さい。 ◆小演習6-2は、PAD図の 緑枠にほぼ対応しています。 これに10 Gibbs.txtと残りのプ ログラムを付け加えて.課題 を完成して下さい.



#### 次々回以降:モンテカルロ(MC)法

・いわゆる『あたりはずれ』 (hit-or-miss) 法. 右図のような、正方形領域  $(-1 \leq x \leq 1, -1 \leq y \leq 1)$ 内に、擬似乱数で点(x,y) を打つ、 この点が、原点を中心と する半径1の円内に入る ( $t_1 + y_2 + y_1 + y_2 + y_2$ 確率を4(正方形の面積)倍 すれば、円の面積(=円周率) を求めることができる。

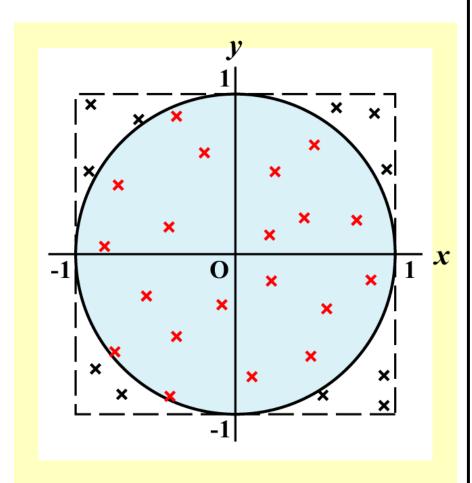


図:モンテカルロ法による円の面積